

日本盲人図書館開館直後の活動実態： 1940 年 11 月 10 日～12 月 31 日

立花 明彦

(静岡県立大学短期大学部；教授)

An account of the activities following the opening of the Japan Library for the Blind

By Akehiko TACHIBANA

(University of Shizuoka, Junior College)

はじめに

1940 年に開館した日本盲人図書館（現：社会福祉法人日本点字図書館）は今日、蔵書数・点字図書 21,084 タイトル、録音図書 17,374 タイトル（2017 年 3 月末）を有し、日本最大の視覚障害者のための図書館に発展している。創設者である本間一夫（1915～2003）は、開館準備の記録や開館後の業務日報を大学ノートに点字で書き取っていたことが、2010 年、日本点字図書館内で発見された複数の原物によって明らかになった。これらのノートに記されている事柄は、これまで詳らかにされていなかった開館に向けての準備の内容や開館直後の活動実態を語る貴重な 1 次資料と言える。本資料を読み解く作業は日本点字図書館内に設置されている「本間記念室委員会」やこの委員会に属する委員の個人研究等によって進められており、その成果も公表されている¹⁾。本稿はこのノートの記述のうち、1940 年 11 月 10 日の開館からその年の 12 月 31 日までに注目し、1 ヶ月余りの活動実態を明らかにして考察するものである。

1. 蔵書の整備

日本盲人図書館は 2 階建ての小さな借家で、階下の 6 畳一部屋に特注の木製書棚 5 本を据え、約 700 冊の点字図書を並べて開館した。職員は全盲の本間だけで、事務作業のために近くにあった東京盲学校（現・筑波大学附属視覚特別支援学校）師範科の学生を短時間のアルバイトで一人雇っている。

開館日から年末までの記録を読むと、この間に図書館活動として行っていたことは、①蔵書の整備、②図書館の広報、③貸出・来館者への対応の三つに集約できる。

蔵書の整備では、①寄贈図書・発注図書の受け入れ、②蔵書目録の作成、③点訳奉仕者養成講習会への協力が挙げられる。

1.1 寄贈図書・発注図書の受け入れ

蔵書のほとんどは、当時点字出版されていた購入可能なものを買ひ揃えたが、具体的な購入作業はこの年の 9 月から始めており、「図書貸出事業準備記録」と題した大学ノートには、発注先の点字出版所と発注図書、さらにはその納品日が記されている。とはいえ時局柄、物資の

不足が点字出版界にも及びはじめ、納品が遅滞し、開館後もその受け入れが続いた。11月22日の項には「桜雲会と光の家の本が遅くて困る」とあり、また同月25日には「光の家の書籍10部だけ到着。まだずいぶんあるのだが、遅くて閉口。」との一文が記されていて、納品の遅れに対する本間の苛立ちがうかがえる。一方、視覚障害当事者の間には図書館の誕生を歓迎し、自身が所有していた点字図書をより多くの視覚障害者と共有しようとして本間の図書館に寄贈する動きが開館前から起こり、開館後も続いた。表1は11月10日以降、12月31日までの日報から、寄贈書の受け入れをまとめたものであり、この間には、点字図書21冊と雑誌複数の寄贈があった。

1.2 蔵書目録の作成

図書の利用は今日と同様、全国を対象に郵送による貸出方式を取った。この方式では、利用者に蔵書の内容を伝える必要があり、目録の製作が急がれた。11月20日の項には「(前略)これらによっても早く目録を完成しなければならず、その準備にカード作成を開始した。」とあるように、本間自身、このことを強く意識していたことがわかる。蔵書目録は、最初にカード式の書名目録の作成に着手し、その作業はアルバイトの学生に委ねている。またこのカード作成にあたっては、事前に9月23日と10月30日の2回、記入内容等について日比谷図書館に出向き、図書館員から直接に教を乞うているのは興味深い。カードによる書名目録の完成を受け、点字版の蔵書目録の製版と印刷に移り、12月23日に最終的な完成を見て利用登録者をはじめ、視覚障害関係施設併せて307の発送を完了させている。この日の記述には「(前略)午前285、午後22計307の図書目録発送をついに完了。午後はすっかりいい気持ちになって信仰会のクリスマスに出た。真船さんと山本さんに深い感謝。(後略)」と記しているように、本間の安堵感が伝わってくる。

1.3 点訳奉仕者養成講習会への協力

点字図書館事業にとって最も頭を悩ますのは、安定した財源の確保と、利用者の読書欲を駆り立て、それを満たす蔵書の維持、すなわち、いかに点字図書を増加させるかにある。日本盲人図書館の場合、前者については豪商であった本間の実家からの資金協力が約束され、当面の大きな心配はなかった。しかし後者に関しては具体的な方策を持ち合わせていなかった。この問題の救済者となったのが社会教育家で大正から昭和の初めには「希望社」を、その後「心の家」を主催した後藤静香(1884～1969)である。本間と後藤の最初の面談は1940年10月で、このとき後藤は「心の家」の機関誌「教養」11月号で点訳奉仕者募集をすること、11月から毎月第1日曜日、および第2土曜日の家庭集会前、点字講習会を開くことを提案した。第1回となる講習会は同年11月3日に開催され、以降予定通り月2回の講習会が持たれ、開館後から年末では、12月1日(日)と同14日(土)に開催され、本間は毎回出席し、点字の説明をしている。

2. 図書館の広報

図書館の広報としては「図書館ニュース」の発行がある。広く全国読者との連絡を図ること

を目的とし、新着図書の案内、その他一般良書の解説や図書館の活動状況等を内容としたもので、媒体は点字版のみ。月刊で、毎号数枚のページ数であったが、5月号と11月号は特別号とし、1部5銭の購読料を取った。ただし年額の購読料は50銭と割り引いていて、読者への配慮が察せられる。

現物は創刊号となる1940年11月号が現存するだけである。それによれば、発行日は毎月1日としているが、創刊号は26ページ仕立てで、依頼原稿の到着が遅れたことも影響し、日報によれば、11月7日から点字製版に入り9日に完了し印刷、17日～19日で約680部を郵送している。11月30日の日報には、印刷代の支払い記録があり、この号は全部で750部を印刷したことがわかる。上にも記したとおり、「図書館ニュース」は有料としたが、創刊号に限り、図書館創設を広く宣伝するために、無償で全国の視覚障害関係施設や団体に郵送したことが推察される。

表2は、創刊号の目次を示したものである。本間の依頼に応じ、筆を執った岩橋武夫（1898～1954）は、当時の盲人福祉事業の先駆者で現・社会福祉法人日本ライトハウスの創始者であるが、ミルトン研究の英文学者でもあり、関西学院大学で講師として教鞭を取っていた時期もある。本間自身、関西学院大学の学生時代、岩橋の講義を受け、公私に渡り教えを乞うている。斎藤百合（1891～1947）は、盲女性の教育と福祉、地位向上に尽くし、当時、盲女性の保護・訓練施設であった「陽光会ホーム」を主催していた。本間は、斎藤に誘われ、大学を卒業してから図書館を立ち上げるまでの1年半余りの期間、陽光会発行の点字雑誌「点字倶楽部」の主筆を務めている。中村京太郎（1880～1964）は、大阪毎日新聞社発行の点字週刊新聞「点字大阪毎日」（現「点字毎日」）の編集長である。また佐藤在寛（1876～1956）は、ろう教育者、社会教育者で、函館市教育界の元老として知られ、当時は本間が盲教育を受けた函館盲啞院の院長を務めていた。このように、創刊号は当時の盲人の教育・福祉の業界、および社会において著名な人々に執筆を依頼していることは注目される。

なお、「図書館ニュース」第2号は全8ページで、同年12月2日に製版に着手し、5日までに270部の印刷・発送を終えている。また第3号となる1941年1月号8ページは、12月29日に編集し、翌日製版。350部を印刷して31日に280部の発送を完了させた。30日の項には「図書館ニュース2巻1号4枚の製版および350の印刷を小林さんとやりきって午後から夜は、その製本、帯封かけに夢中となり3時までばあやとでがんばった。（後略）」とあり、毎月1日発行を強く意識していたことがうかがえる。

3. 貸出・来館者への対応

3.1 貸出

「図書館ニュース」創刊号には“貸出規定”が掲載されていて、図書の貸出を受けるには最初に氏名・住所・年齢・男女別・職業の5項目を紹介し“図書借り出し券”の発行を申し込むようにとある。図書貸出は一人1冊とし、貸出期間は内地2週間以内、外地3週間以内と定めている。本間は、従前の点字図書館が貸出地域を限定したり、貸出に当たって保証金を求めて

いたのに対し、全国の視覚障害者に無料・無保証で貸し出すことに拘り実行した。全国としながらも、内地と外地を設定したのは、当時の日本の国政を反映したものであり、さらには内地と外地で貸出機関に差を設けたのは、当時の郵便事情に考慮した対応と言える。また貸出冊数1回1冊は、蔵書数の乏しさと、可能な限り多くの盲人の貸出希望に応じようとして取った策と考えられる。貸出規定の貸出冊数とその期間を示した項には「希望図書名はなるべく第1志望より第3志望までお知らせください」との一文が添えられているのも、このことを裏付けている。

日報には時折、次のように図書館開館に対する盲人の反応、利用者数の動向を示唆する記述が見られる。それらによると、借り出し券の発行は開館から17日後に50人に達し、1ヶ月で100人を記録している。また貸出も日を重ねるにつれ増加していることが読み取れる。

「(前略)一昨日あたりから日に10通以上の手紙が来、実に楽しみだ。借り出し券もどしどし出る。今日までで23号まで」(11月23日)

「借り出し券ついに50号に達す。原稿用紙100枚90銭。手紙は今なお日に10数通を参しその整理のみで忙しきこと限りなし」(11月27日)

「(前略)ニュース2号の反響として借り出し券の申し込みが非常に多く、今日は9枚にのほり、ついに第100号に至る。(後略)」(12月10日)

「本の動きが非常に活発となり、15冊発送、ために日曜にもかかわらず末永さんを午前午後ともにわずらわす。(後略)」(12月29日)

3.2 来館者

図書の利用は郵送を主にしながらも、テーブル一つとイス2個を用意し、館内閲覧にも応じた。とはいえ、閲覧日と時間は毎週火・木・土の午後1時から5時とし、日時を限定している²⁾。図書館の所在地は東京市豊島区雑司が谷町で、近くには東京盲学校があったことから、閲覧の曜日はともかく、その時間については午後としていて、盲学校生徒の利用に配慮したものと推察される。実際、日報には来館者の名が記されていて、閲覧者は多い日で5人を数え、盲学校の生徒が占めたことを物語るように同じ名が何度か見られる。

4. まとめ

先にも記したように、日本盲人図書館の開館は1940年11月10日で、同日午後、関係者20名が列席し、ささやかな式典が挙行された。本間が書き残した大学ノートに目を通して見ると、開館はしたものの、蔵書は発注したものがこの日までに全部揃わず、蔵書管理のためのカード目録や郵送貸出の便に供する点字版蔵書目録は未完成で、さらには「図書館ニュース」も発行予定日からずれ込むなどして、準備万端での船出と言うよりも、見切り発車的な色合いが濃い。このため開館後の1ヶ月近くの活動の中心は、図書の受け入れや目録の作成等、蔵書の整備に追われていて、なぜ開館日を11月10日に設定したのかとの疑問がわく。つまり、開館日を先送りしても事業には大きな影響は表れないし、そもそも、大学ノートには、本格的な開館準備に入るのはこの年の9月4日からとあり³⁾、2ヶ月で準備を完了させることは難しいと

本間にも予想されたはずである。11月10日は日曜日で、開館式を行なう場合、列席者の参加が得やすいことはあるが、これとは別の拘りが本間にはあったのではなかろうか。すなわち、1940年は皇紀2600年に当たり、11月10日には奉祝式典が宮城外苑において盛大に執り行なわれた。本間は、小さな図書館が幾久しく反映するやうにとの強い思いから、皇紀2600年の奉祝にあやかろうとして、早くからこの日を開館日に定め、式典の案内をしたのではなかろうかと推察される。

広報誌としての「図書館ニュース」の発行、特に創刊号での寄稿者の顔ぶれは注目される。前述したようにこの号は、当時の盲人の多くが知る著名人が館創設の意義や期待等を執筆しているが、それは全国を対象に貸出を行なう小さな図書館、および若き無名の館長である本間への信頼度を示すための戦略であったやうにも受け取れる。日報の12月10日の項には「ニュース2号の反響として借り出し券の申し込みが非常に多く、今日は9枚にのぼり、ついに第100号に至る。」とあり、「図書館ニュース」第2号の反響が大きかった旨の記述が見られるが、発行部数からして創刊号のほうが圧倒的に多く、多くの盲人が手にしたはずであり、この号があったからこそ、第2号の反響につながったと見るのが妥当である。借り出し券の発行を受ける盲人は日を追うごとに増し、それに伴って貸出数も増加していて、図書館事業としては上々のスタートを切ったと言える。こうした状況について、本間自身一定の手応えを感じていることが日報から読み取れる。今後は、対象期間を広げて、その後の活動を考察していきたい。

[注]

- 1) 本間記念室委員会編『本間一夫と日本盲人図書館－本間一夫生誕百年記念出版－』日本点字図書館、2015.
- 2) 報告三つ、「図書館ニュース」創刊号、日本盲人図書館、1940, p 24.
- 3) 「図書貸出事業準備記録」には、「9月4日 故郷より東京へ帰り積極的準備の気構えにいる。」とある。

[参考文献]

- 伊藤宣真他編：点字とあゆんだ70年－日本点字図書館点訳奉仕活動の記録－、日本点字図書館、2010.
- 本間一夫：指と耳で読む、岩波書店、1980.
- 本間記念室委員会編：本間一夫と日本盲人図書館－本間一夫生誕百年記念出版－、日本点字図書館、2015.

表1 寄贈図書一覧（1940年11月10日～12月31日）

*大学ノートの記録を元に筆者作成。

月日	冊数	タイトル
11月16日	2冊	灸術教科書、和田翁歌集
11月19日	1冊	『別科用解剖学』
11月28日	1冊	『生命の路へ』
12月7日		雑誌2箱
12月10日	2冊	『こいごろも詩集』、『大地』
12月12日	3冊	『母・妹・妻』、『海と兵隊』（上・下）
12月16日	1冊	『母・妹・妻』
12月18日	2冊	『鍼按科全書 解剖学』（上・下）
12月25日	1冊	『イノック』
12月26日	6冊	『バハウラと新時代』（3）、『実用動物学』『イエスの良心と藝術』（2）
12月31日	2冊	『日の丸読本』、『支那事変忠勇美談集』

表2 図書館ニュース創刊号 目次

開館にあたりて 本間一夫
日本盲人図書館開館に際して 岩橋武夫
日本盲人図書館の誕生 齋藤百合
日本盲人図書館開館に期待す 中村京太郎
本間君を紹介す 佐藤在寛
点字図書館開設の意義 佐藤勇
報告三つ
編集後記